デジタル版
2022年
8月18日号
Vol. 15

成岡マネジメントオフィス事務所通信

NMO OfficeLetter

３年ぶりに完全復活　京都五山の送り火！

松明に点火される法音寺

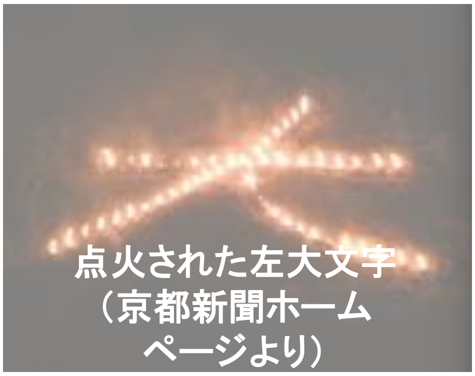
令和4年度8月16日のお盆の京都五山の送り火行事は、3年ぶりに全面復活して行われた。当日、19時くらいから土砂降りの豪雨になり、点火を10分くらい遅らせたが、右大文字の点火に始まり、5分刻みに時計回りと反対方向に、妙法、舟形、左大文字、鳥居と順番に点火された。コロナ禍のこの2年間は、密を避けるという趣旨で全面点火はできなかったが、今年は以前からの大文字が復活した。伝統の行事であり、祇園祭と同じく伝統行事がそのままの形で復活するのは、生粋の京都人としては非常に喜ばしいことだ。実は、

保存会の方々が担ぐ松明
（2019年の写真より）

2年前に現在の右京区太秦に引っ越したので、右京区で迎える大文字の行事は、そういう意味では初めてだ。3年前2019年の大文字は、実家の北区で迎えた最後の大文字だった。広い庭にバーベキューの設備を持ち込んでもらって、50名になるゲストを迎え入れ、左大文字の真下での最後の鑑賞会を行った。ああ、これがこの実家の庭から眺める最後の大文字になると思うと、妙に感傷的になった。先祖の霊が、この送り火とともにあの世にまた戻るのだと思うと、思わず合掌してしまった。送り火と一緒に過ごしてきた我々は、単なる観光ショーとは思えない何かがある。今年は、全面復活となったので、3年ぶりに地元近くに出向いて過ごした。

＜解説＞送り火は、地元の保存会の人たちが、護摩木という木材を「火床」という石で組んだ点火場所に事前に担いで持って登っている。左大文字の「火床」はおおよそ1メートル四方で、そこに我々が「家内安全」「商売繁盛」「当病平癒」などと願い事を書いた木材を井型に組み上げてある。事前に、周囲の草刈りや清掃をして、火が飛んでも周囲に燃え移らないように準備がしてある。地元のお寺で採火した火は、保存会のみなさんと一緒に一列に並んで、鐘の音とともにお山に登る。行列が持つ松明のお炎が点々と続く風情は、なかなかなものだ。道中の地元に家の前には、

前日の護摩木の受付


点火された左大文字
（京都新聞ホームページより）

かがり火が焚かれ、小さな松明に点火された道が照らされている。読経と鐘の音とともに、松明行列がお山を目指して行進していく。これが何百年も続いた伝統行事なのだ。観光客向けのショーではあるが、先祖の霊をあの世に送る大事な行事なのだ。この間は、お墓の中にいる先祖の霊は、実家の仏壇に戻っている。数日前に、先祖の霊をお迎えにいって、1年ぶりに自分の家の仏壇に一時帰宅し、この送り火とともに、またあの世に戻っていく。そんな先祖の霊を厳粛な気持ちで見送るのが、「五山の送り火」なのだ。来年もコロナ禍の影響を最小限にして、五山全部にすべての火床に点火されることを祈るばかりだ。

BUSINESS MANAGEMENT&COORDINATION
株式会社成岡マネジメントオフィス
〒600-8411　京都市下京区烏丸四条下ル水銀屋町620
COCON烏丸４F　シティラボ内
TEL:075-366-6611　FAX:075-366-6100　info@nmo.ne.jp

Copyright (C) Naruoka Management Office. All rights reserved.